

季刊 青葉の森から 第41号

2016年7月6日 発行



自然の#♪リズム♪に合わせて楽しもう!

雨の季節が終われば夏本番! 夏休みやお盆休みなどでお休みの機会が増えるこの時期。生き物たちの営みやさわやかな森の空気を感じに、早朝や夜の森へ出掛けてみませんか?

野生の生きものたちは、人間とは違う生活パターンで暮らしています。自然の時間に合わせると、普段は見られないものや神秘的な光景に出会えるかも

しれませんよ! 森も昼間は暑くて活動しにくいので、朝早くなどの涼しい時間に散歩をするのがおすすめです。まとまった休みを取れるチャンスに、自然の時間に合わせ、リズムを感じていろいろな発見を楽しんでみてはいかがでしょうか。
(り)



青葉の森 むかし・いま・みらい①

夏号と秋号の2回に分けて青葉の森緑地(以下「青葉の森」)について、過去から現在までの土地利用や森の様子の変り変わりを考察し、これからについて考えます。

今号では「むかし」について書いてみたいと思い

ます。ただ、昔といってもそれほど古い話ではなく、記録の残る昭和20年代以降の話です。

現在の青葉の森は背の高い木々に覆われ、一見すると太古から続く原生林のように感じる方もいらっしゃるかも知れません。

しかし、それぞれの木の年齢はそれほど高いものではなく、園内でみられる切り株の最高齢でも70歳前後（67～77歳）であることが宮城教育大学の学生さんの調査からも判明しています（2010 姉歯、2011 菊池）。今から70年前というと第二次世界大戦が終了して間もなくであり、園内のヒノキはすべてその頃に植林されたようです。

では、その頃の青葉の森はどんな姿だったのか、航空写真をもとに時計の針を戻してみたいと思います。

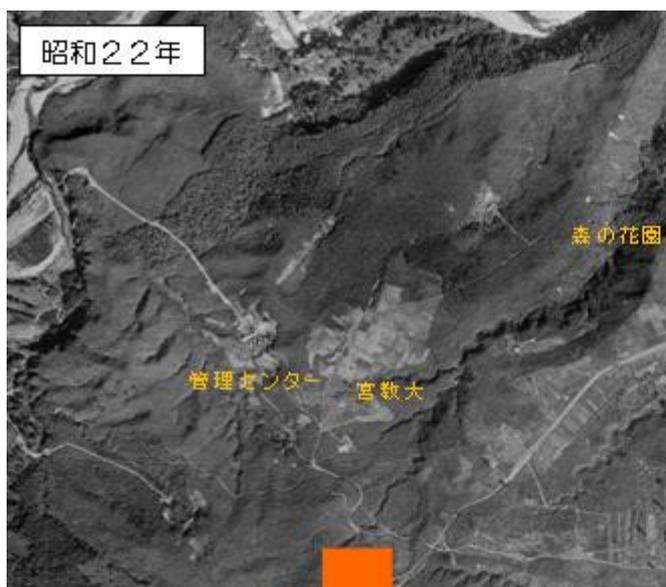
昭和20年代、青葉の森周辺は様々に利用されていました。当時の燃料は薪や炭、そして亜炭。夕暮れどきに街にただよう亜炭を燃やす煙と匂いは仙台の風物詩となっていたらしく、亜炭採掘は重要な産業でした。昭和22年の航空写真には現在の管理センター付近に多くの建物や「モミジのみち」が作業道だった様子がはっきり写っています。

今でも管理センター周辺には亜炭採掘の安全を祈る「山の神」碑や亜炭坑の跡とみられる穴が随所にみられますので、亜炭採掘の拠点になっていたものと想像されます。管理センター周りに残る不自然な地形も、亜炭坑で働いていた方々の作業小屋や畑の跡だと思われます。ですが、広い範囲で森を切り開いた様子はなく、現在の宮教大キャンパス付近が畑地として利用されていたことを除けば、戦後まもなくの青葉の森は人々の活気が満ちる賑やかな森でありながらも野生動物たちが暮らす場所として成り立っていたと想像されます。

しかし、昭和30年代に入ると畑地や針葉樹植林などの人間活動に関わる面積が拡大していき、昭和38年の航空写真にはゴルフ場が写っています。昭和40年代に入ると畑地だったところは大学のキャンパスや宅地が造成され、昭和50年の航空写真には現在の「森の花園」より西側の森が皆伐されている様子が撮影されています。このように、たった30年程のあいだに青葉の森周辺は急激に変貌してきたようです。

このような状況のなか、森が残る民有地を仙台市が買い上げ、もともと市有地だった部分と合わせて保存緑地となり、平成に入ってから再整備されて現在の「青葉の森緑地」として未来永劫保全されることになりました。次号では、守られた森そのものがどういう変化をしてきたのかを考察しながら、青葉の森のこれからについて考えていきたいと思います。

（千）



樹木の話「ミズキ」

青葉の森入口にあるミズキです。名前の由来は春先に枝を折ると枝先から大量の水を吹き出すことからミズキ（水木）と名がついています。



青葉の森駐車場近くの「ミズキ」

東北に多い樹木で、木材は均質で木肌は白く、けずりやすいことから“こけし”の材料としても利用されています。



ミズキは代表的な陽樹（太陽光が十分に当たる場所で生育する樹木）です。たくさんの光を受けるため枝の伸び方が工夫されています。春先に伸ばした枝がその後も光を受けるためさらに伸ばして葉を広げていきます。

またその枝の張り出し方にも特徴があります。すべての葉に効率よく光が当たるように、枝葉は幹から水平に張り出し（うちわを広げた形）ています。上から順に四方に広がりながら枝が並んでいるので、



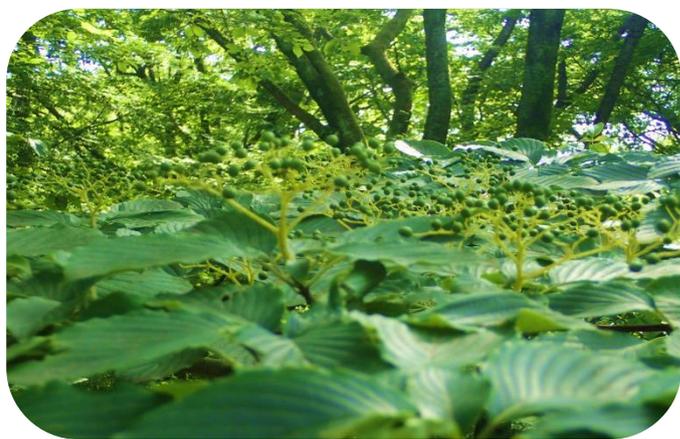
葉を落とすと樹形はこのようなイメージ

秋に葉を落としたあとの樹形を見ると枝の特徴がよくわかります。

毎年成長している伸びた枝の継ぎ目に小枝が上向きに飛び出して茎の先に実がなっています。これは鳥に見つけ

てもらおうための作戦と考えられます。

下から覗いて見ても実は見ることはできませんが上から見るとしっかり見ることができます。今は緑色をしています。秋には黒く熟した実を結び、多くの鳥に運ばれることになるでしょう。



横から見たミズキの種子。上からは良く見えません。（下から見上げてても分かりません）葉がうちわのように広がっている

陽樹であるミズキは、暗い林内では生き延びることはできません。

ではどのようにして生き延びているのでしょうか？それは種子が10年以上も土の中に埋まっても発芽する能力をもっているからです。

一般的にドングリなど種子が大きい植物は、その大きな種子の中に栄養がたくさん蓄えられているので発芽力は大きくなります。その反面、種子としての寿命は短く乾燥するとそのまま死んでしまいます。逆に種が小さいと発芽力は小さくなりますが、乾燥にも良く耐え長い間じっと待っていることができます。（休眠状態）

5ミリ程の小さなミズキの種子は土の中でじっとしています。そして台風、寿命、枯渇など林床が変



秋になると黒く色づきます

化すると、植物の葉を透過していない直射日光の量をするどく検知し、頭上に何もないと判断し芽を出します。暗い森の中の木が育たない環境でじっとそのチャンスを待つ能力。すばらしいセンサーをもった種子と言えます。（あ）

青葉の森 夏のイベント

癒しの空間「私だけの手のひら苔庭」

◆苔を採集して簡単な箱庭をつくりま

日時：7月17日(日)

① 午前：10時～正午

② 午後：2時～4時

対象：高校生以上

定員：各回10人(電話受付による先着制)

※子ども同伴をご希望の方はご相談ください。

持ち物：飲み物、雨具、園芸用シャベル、軍手、ビニール袋、虫よけ、汚れても良い服装(野外での作業もあります)

参加費：300円(1人1作品)

☆申込み：7月6日(水)午前9時から電話受付



森でアート「森の色あそび」

◆森全体をパレットにして、自然素材で色遊びをします。

日時：8月28日(日)午前10時～正午

対象：小学生と保護者

定員：15人(応募多数の場合は抽選)

持ち物：飲み物、帽子、雨具、虫よけ、タオル、動きやすい服装と靴

参加費：無料

☆申込み：必要事項[①参加者全員の氏名(フリガナ)、②子どもの学年、③電話番号]を明記して下記Eメールアドレスへ8月15日必着
aobanomori_moushikomi@sendai-park.or.jp

青葉の森の夏の陣

「手作り水鉄砲で大合戦！」

日時：7月24日(日)

午前10時～午後2時半

対象：小学生と保護者

定員：25人(電話受付による先着制)

参加費：無料

持ち物：昼食、飲み物、帽子、雨具、虫よけ、タオル、着替え、ぬれても良い動きやすい服装

☆申込み：7月7日(木)午前9時から電話受付

大人の森あるき

日時：9月4日(日)午前10時～12時

対象：一般

定員：15人(電話受付による先着制)

持ち物：飲み物、帽子、雨具、虫よけ、タオル、動きやすい服装と靴

参加費：無料

☆申込み：8月6日午前9時から電話受付

※イベントの詳細、申込方法等は変更になる場合がございます。詳しくは毎月の「市政だより」でご確認ください。



スミナガシという蝶の幼虫がいました。アワブキの葉を食べて育ちます。成虫が見られるのは7月末から8月頃(k)

情報誌 季刊「青葉の森から」第41号 平成28年7月6日発行

発行：(公財)仙台市公園緑地協会

企画編集：青葉の森管理センター

青葉の森管理センター

開館時間：午前9時～午後4時30分 月曜年末年始休館

〒980-0845 青葉区荒巻字青葉260

TEL:022-263-2101 FAX:022-263-2102

申込み専用電子メール aobanomori_moushikomi@sendai-park.or.jp

ホームページ <http://www.sendai-park.or.jp/web/info/aobanomori/index.html>



地下鉄東西線「青葉山駅」から徒歩15分